企画展

弥生時代の鈴鹿

上箕田遺跡出土絵画土器

はじめに

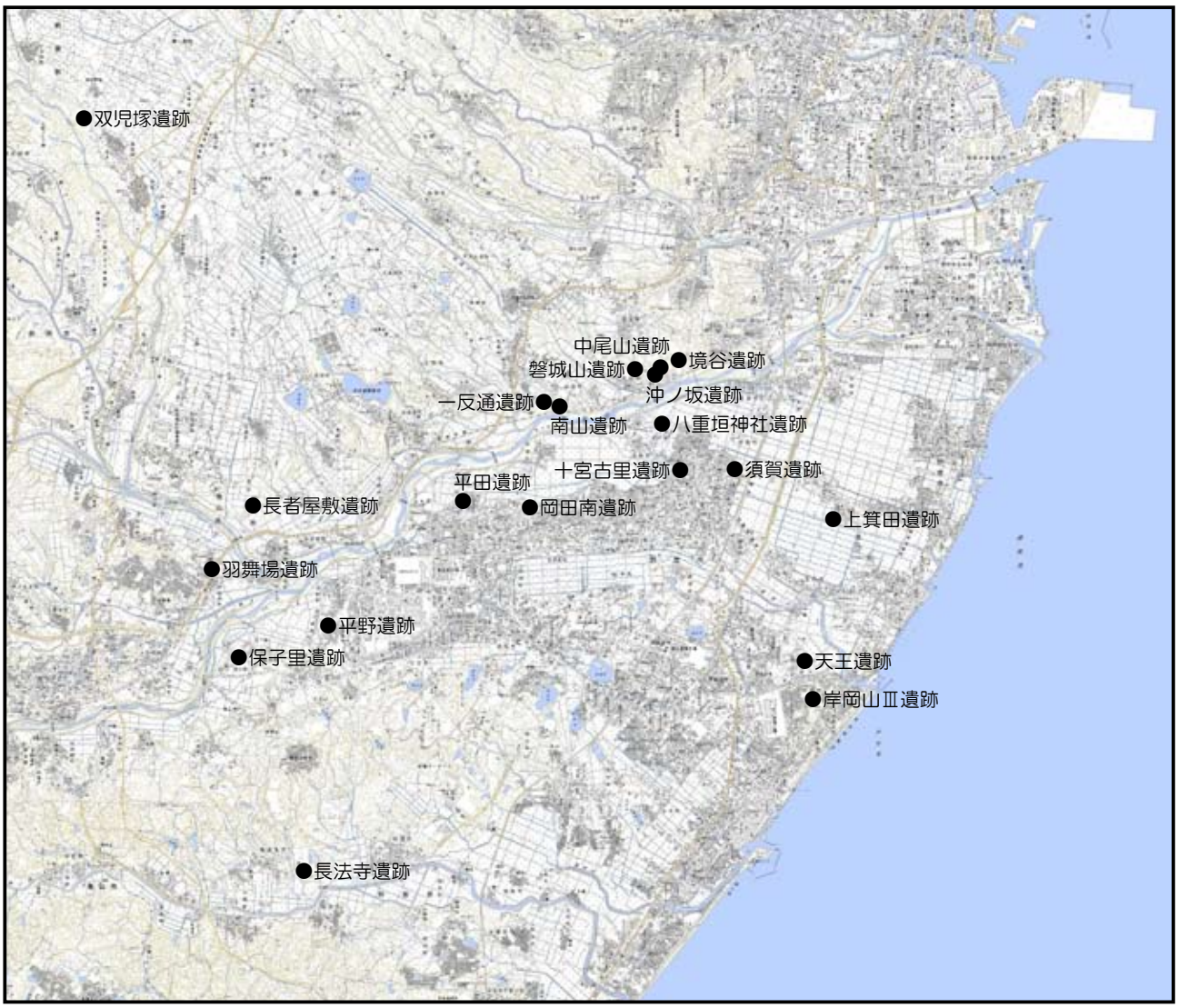
鈴鹿市内には 1300 を超える遺跡があります。これまでに鈴鹿市内で実施した発掘調査では，弥生時代の遺跡が多く確認されています。上箕田遺跡の「人・矢・鹿」が描かれた土器（市指定文化財）や須賀遺跡の東海地区最大級の壺など注目される資料が多数あります。

今回の展示では，市内各地区に所在する弥生時代の遺跡を出土遺物から紹介します。

この機会に身近にある埋蔵文化財に対して関心をもっていただければ幸いです。

鈴鹿市考古博物館

Suzuka Municipal Museum of Archaeology



今回展示した遺跡の位置図

保子里遺跡

所在地　鈴鹿市国府町

鈴鹿市中流域の右岸には比較的規模の大きい段丘面が広がり，保子里遺跡はその段丘の端部，標高約４０ｍに位置し，北の鈴鹿川に向かって緩やかに傾斜しています。

保子里遺跡ではこれまでに６次の調査を実施しています。弥生時代の遺構は，竪穴住居２棟，弥生時代中期の方形周溝墓 (1) ４基が確認されました。

大型の方形周溝墓の２基（一辺 10 ｍ以上）は，ほぼ南北に一直線上に造られ，北西隅（陸橋部）が途切れています。小型の２基（一辺７～９ｍ）は長方形の方形周溝墓の近くに築かれ，北西隅以外も途切れています。いずれも墳丘が削られてしまったため，埋葬施設は確認されていません。しかし，周溝内からは，ほぼ完形に近い弥生土器壺が出土しています。

注目されるのは，古墳時代の竪穴住居が方形周溝墓を取り囲むように建てられていることです。古墳時代の人々は墓であるとは知らずに，残っていた墓の高まりを利用していたのでしょうか。

竪穴住居は２棟とも方形周溝墓に壊されていることから，墓が築かれる以前の住居と考えられますが，墓と同時期の集落（住居跡）は見つかっていません。

第２次調査１区遺構平面図

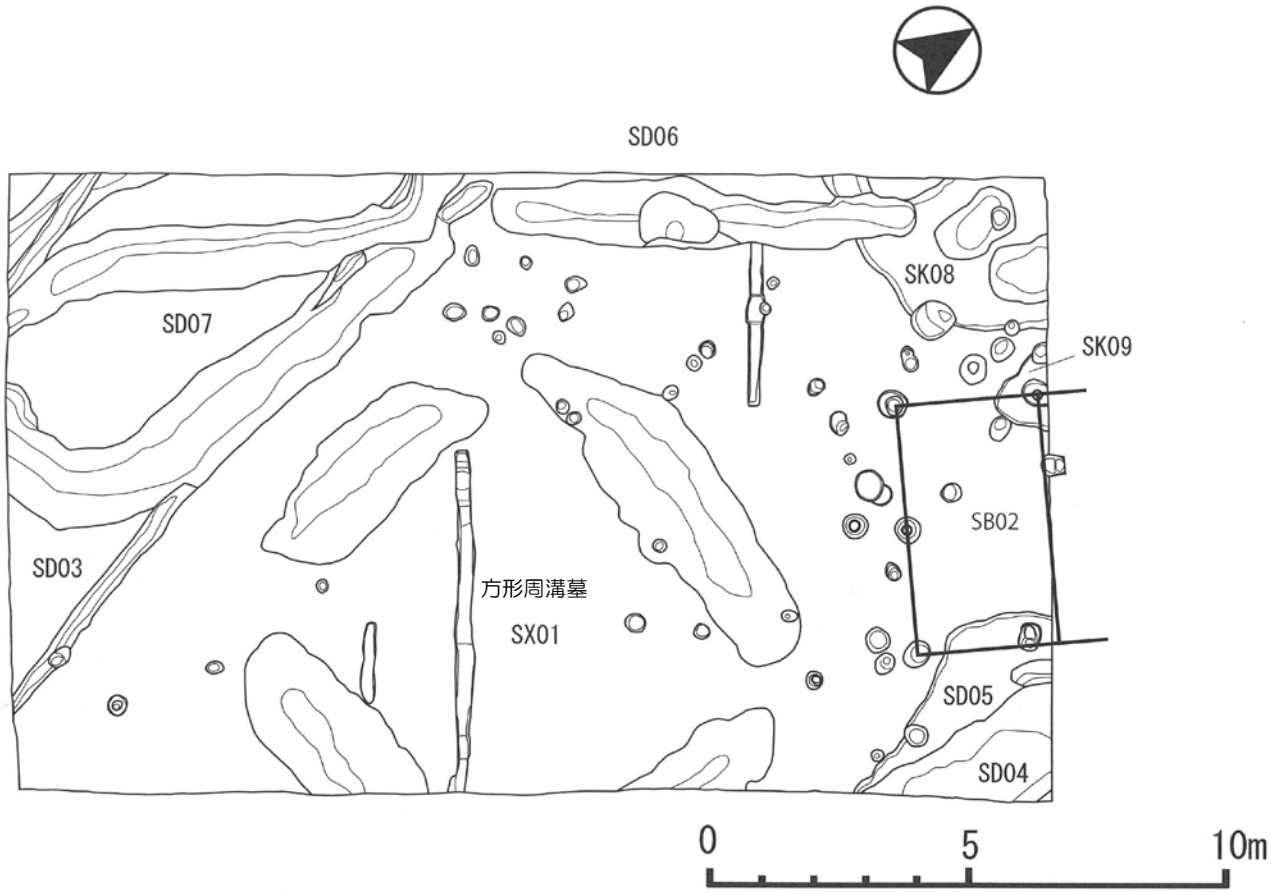
平野（ひらの）遺跡

所在地　鈴鹿市平野町

平野遺跡は鈴鹿川右岸の河岸段丘の中ほどに位置しています。

これまでに６次の調査を実施しました。弥生時代の遺構は２次調査で中期の方形周溝墓１基を確認しています。

方形周溝墓は一辺 10 m程度で，墳丘部分は周囲よりも高く残っていましたが，埋葬主体部は確認できていません。全体を検出していませんが，周溝は四隅が途切れていたと思われます。周溝を共有する様子は見られず，単独で築かれていました。東を除く三辺の周溝内からは，完全な形に近い弥生土器壺が出土しました。



２次調査　遺構平面図

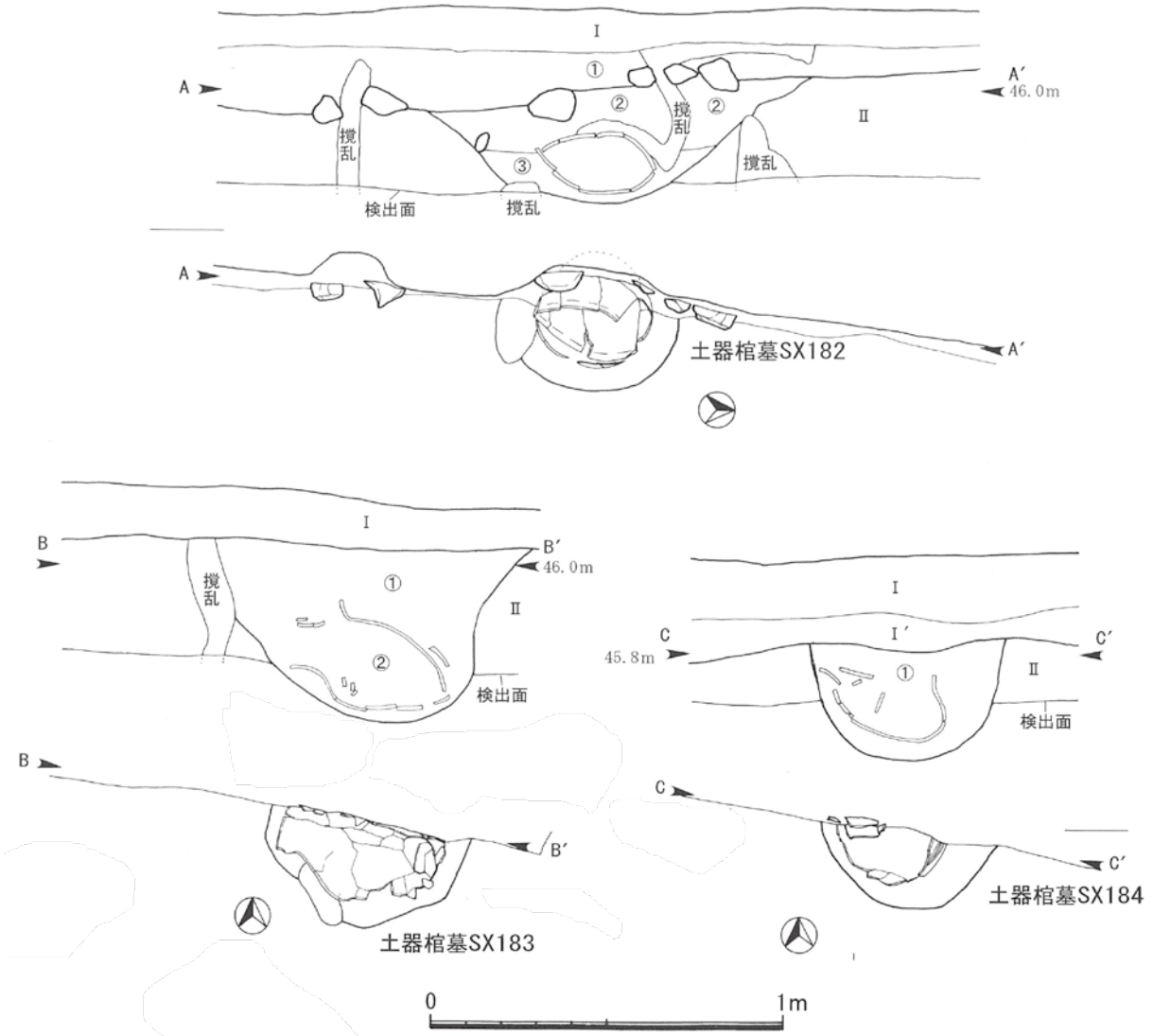
長者屋敷遺跡（ちょうじゃやしき）

所在地　鈴鹿市西冨田町

長者屋敷遺跡は鈴鹿川の支流である安楽川（あんらくがわ）左岸標高約 50 mの段丘上に位置します。当遺跡は奈良時代の伊勢国府跡として知られています。

三重県北中部の道路計画策定に伴い，伊勢国府跡（いせこくふあと）の南面に想定される国府関連遺構の確認のために実施した１７次調査では予想に反して弥生時代前期の土器棺墓（どきかんぼ）(2)，中期の土壙墓（どこうぼ）(3)，方形周溝墓，竪穴住居などが確認されました。

弥生時代前期の土器棺墓４基は，縄文土器の影響の残る深鉢（ふかばち）と遠賀川系（おんががわ）(4) の壺が出土しました。棺に使用された深鉢は煤（すす）が付着しており，日常で使用されたものを転用したものと考えられます。また，壺は口縁部を欠いた状態で使用していました。それぞれ別個体の破片を蓋（ふた）として利用していました。



遺物出土状況

平田（ひらた）遺跡

所在地　鈴鹿市平田本町一丁目

平田遺跡は鈴鹿川右岸の標高約 22 m，鈴鹿川に向かって舌状に張り出す河岸段丘上に位置しています。鈴鹿川によって形成された谷底平野とは４～５ｍの比高があります。

これまでに宅地開発や送水場改築などの開発に伴い，24 次の調査を実施しています。縄文時代から近世までの複合遺跡です。

弥生時代の遺構としては，前期のピット（小穴），後期から古墳時代初頭の竪穴住居，掘立柱建物（ほったてばしらたてもの），方形周溝墓，土壙墓などが確認されています。

ピットから出土した弥生時代前期の壺は底部を上にした状態で出土しました。上部は埋められたときには失われていたものと思われます。

方形周溝墓は６基ほど確認されています。３群に分けられますが，いずれも同じような方位で築かれています。このうち１基の周溝からは縄文時代晩期の完全な形の石刀（せきとう）が墓に供えられた様な状態で出土しました。この石刀は常設展示室で展示しています。

遺構平面図

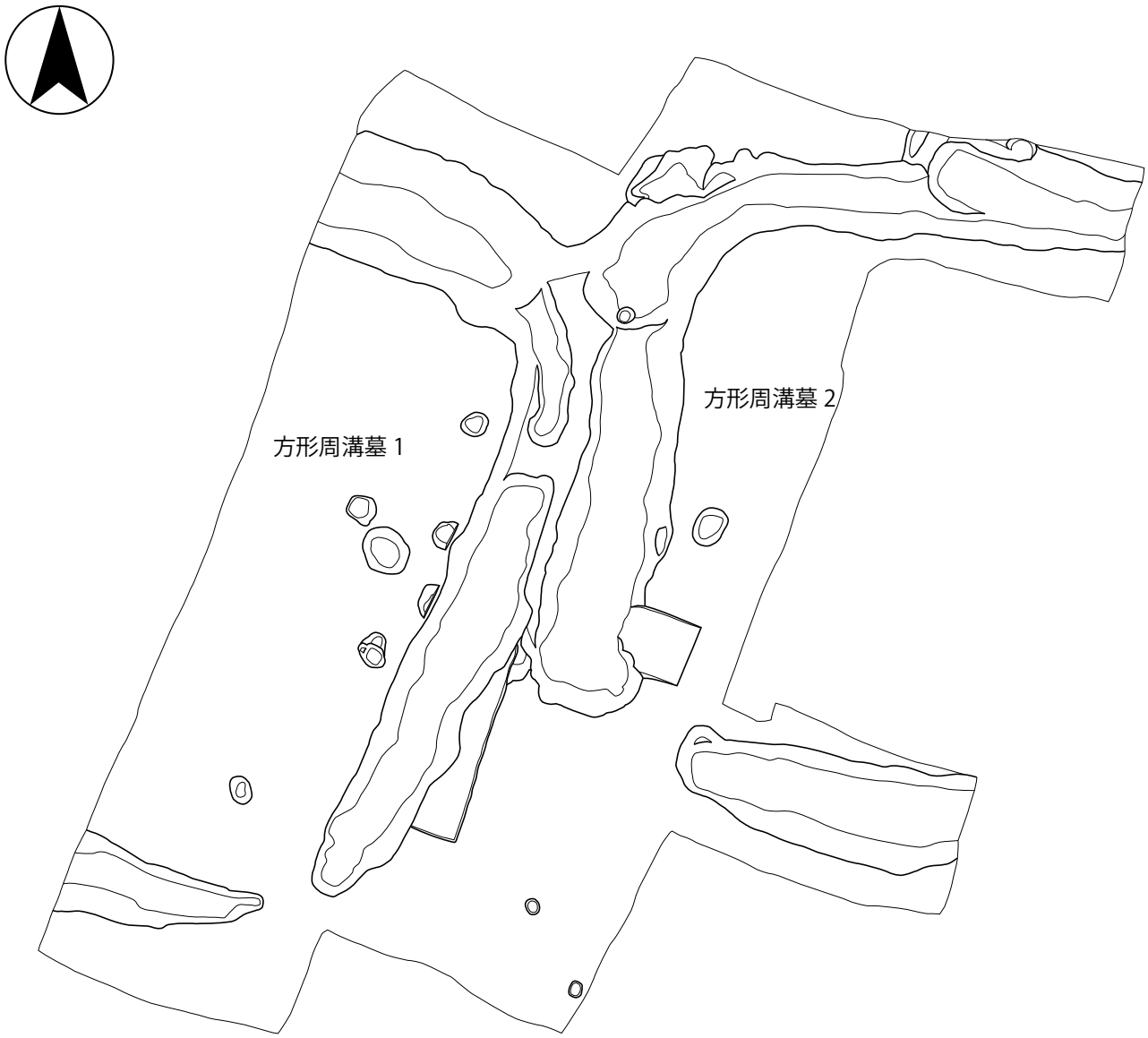
岡田南遺跡（おかだみなみ）

所在地　鈴鹿市岡田三丁目

岡田南遺跡は，鈴鹿川右岸の低位段丘端部に立地します。標高はほぼ 20 mで，鈴鹿川の谷底平野からは 1.5 ～ 2 mの比高があります。段丘崖の直下には低位段丘面が東西に伸びる島状の微高地となって残っており，岡田遺跡が立地しています。平田遺跡からは約 1km 東になります。

これまでに３次の調査を実施し，弥生時代中期の方形周溝墓４基が確認されています。埋葬施設は削平されて失われていましたが，いずれの周溝内からも完全な形に近い弥生土器壺が出土しています。

調査地一帯では弥生時代中期の方形周溝墓が周溝を共有するなど密集して，帯状に連なる墓域（ぼいき）を形成していたことが想像されます。墓域の広がりから，そのもととなる集落はそれなりの規模を持つことが予想されますが，今のところ住居跡は見つかっていません。



３次調査　遺構平面図

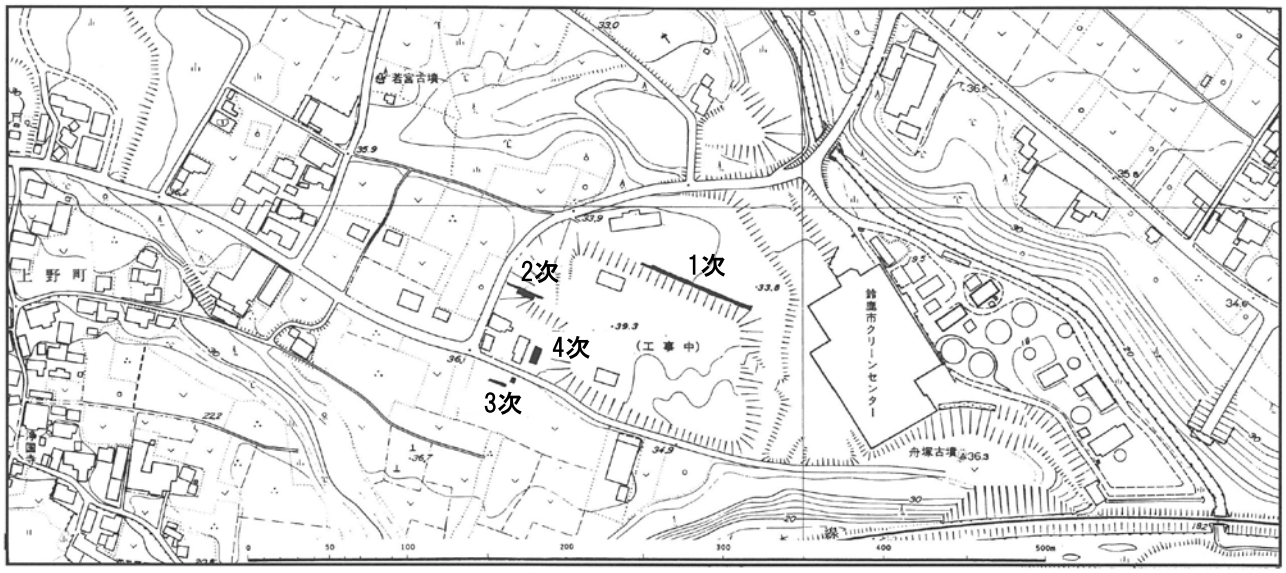
一反通遺跡（いったんどおり）

所在地　鈴鹿市上野町

一反通遺跡は鈴鹿川左岸の段丘上に位置します。弥生前期から後期まで存続した鈴鹿川流域を代表する遺跡のひとつです。茶山（ちゃやま）遺跡とともに玉作（たまつく）り関連の採集資料が紹介され，知られるようになりました。紹介された資料には，筋砥石（すじといし），管玉（くだたま）未製品（碧玉（へきぎょく）），不明碧玉製品，碧玉剥片（はくへん），水晶剥片等のほか，勾玉（まがたま），管玉，臼玉（うすだま），ガラス製玉類があり，古墳が存在していた可能性が考えられますが，擦（す）り切（き）り技法 (5) や細形管玉の存在から弥生時代にさかのぼるのは確実と考えられ，伊勢湾西岸において弥生時代の玉作遺跡として茶山遺跡とともに初めて確認されました。

これまでに４次の調査を実施しています。１次調査では弥生中期から後期の幅 1.5 ～２m，深さ 0.8 mの濠（ほり）が確認されました。小規模な調査でしたが，前期から後期の土器や石器をはじめ，銅鐸（どうたく）片・銅鐸形土製品（常設展示室で展示中）が出土しました。

４次調査では，前期から中期の竪穴住居１棟，竪穴状遺構・濠，後期の濠１条などが確認され，土器，石器が豊富に出土しました。その中には筋砥石が含まれ，発掘調査で玉作りに関係する遺物が初めて確認されました。



調査区位置図

南山遺跡（みなみやま）

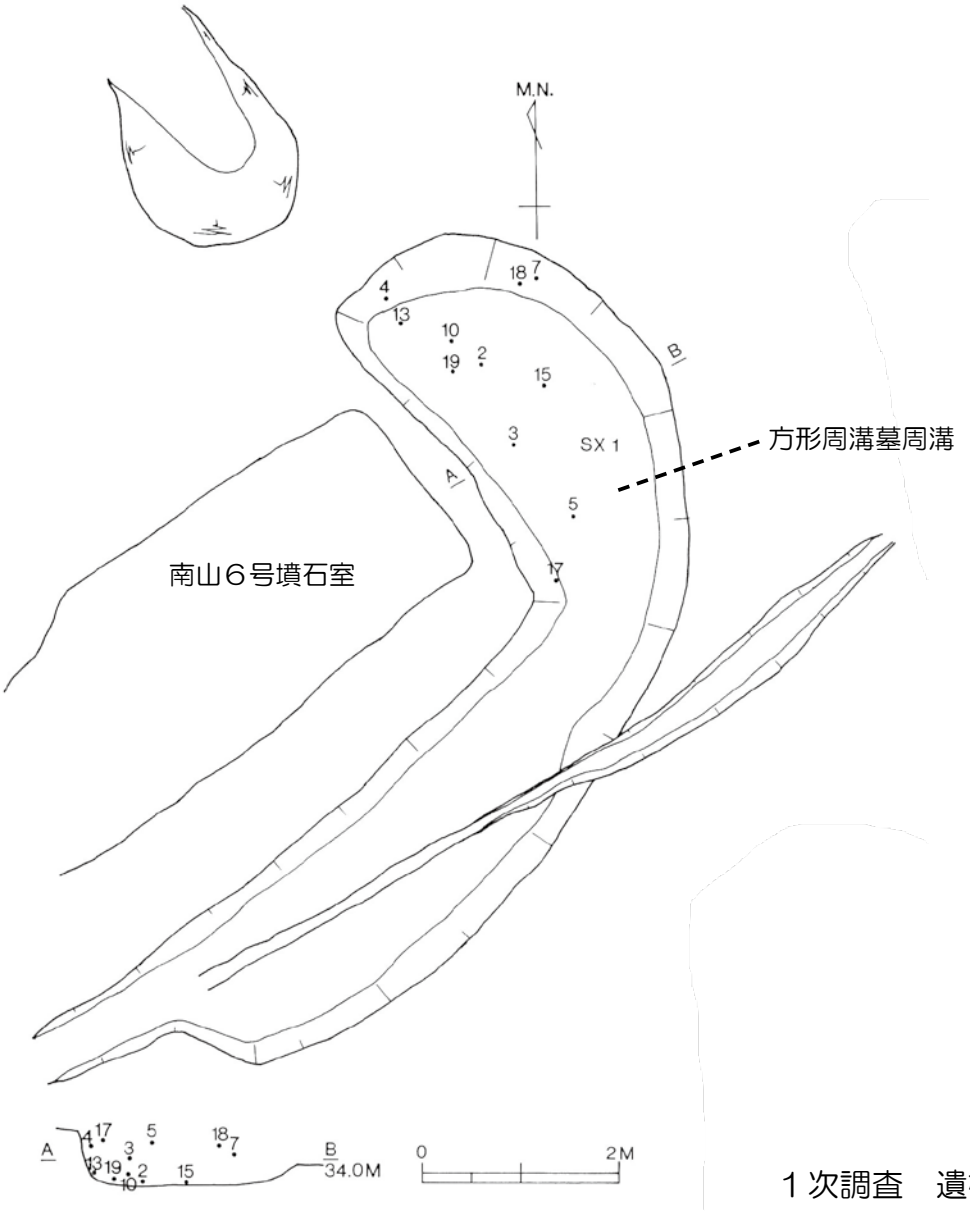
所在地　鈴鹿市河田町

南山遺跡は鈴鹿川左岸の段丘，開析谷（かいせきだに）に挟まれた狭い舌状台地の先端に位置します。谷を挟んで西には一反通遺跡が位置しています。

これまでに４次の調査を実施し，弥生時代後期の環濠（かんごう）(6)，竪穴住居，方形周溝墓が確認されています。

２・３次調査で確認された環濠は舌状の台地を横断するように掘削されています。断面の形状は逆台形で幅 2.5 m，深さは１m程度です。環濠より東で竪穴住居が３棟，西側で１棟と方形周溝墓が確認されています。限られた調査区のため，環濠がどのように区画するかはわかっていません。

１次調査で確認された方形周溝墓の上には，古墳時代後期の古墳である南山６号墳が築造（ちくぞう）されていました。方形周溝墓の墳丘を利用して古墳が築かれたと考えられます。



１次調査　遺構平面図

ばんじょうざん
磐城山遺跡

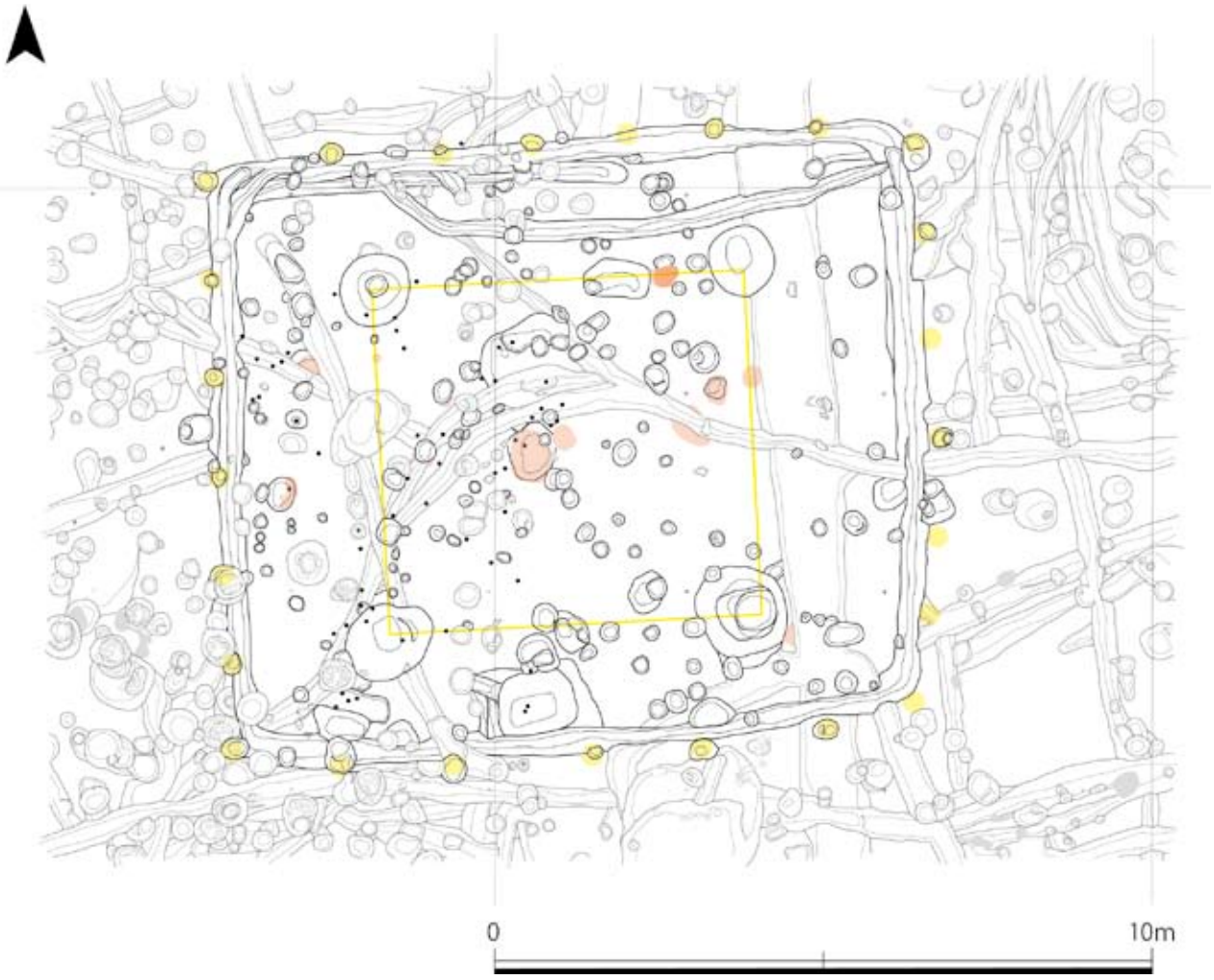
所在地　鈴鹿市木田町

磐城山遺跡は鈴鹿川左岸の，南に向かって突き出す舌状の台地上に位置しています。

これまでに９次の調査を実施し，およそ１万㎡を発掘しています。今年度も 10 次調査を実施しています。調査の結果，弥生時代後期の集落跡が確認されています。

丘陵の先端を寸断するように幅 2.5 mほどの環濠状の溝が掘削されています。その西側で竪穴住居が 200 ～ 300 棟確認されています。市内で最も多くの住居跡が確認されている遺跡といえます。

その中で４•９次調査で確認した竪穴住居は三重県内でも最大級のものです。東西 11 m，南北 9.2 m，床面積は 100 ㎡を超えます。この竪穴住居は磐城山遺跡に人々が住み始めるころの建物で，このあと，おびただしい数の竪穴住居が建てられていきます。



竪穴住居 SH09104 平面図

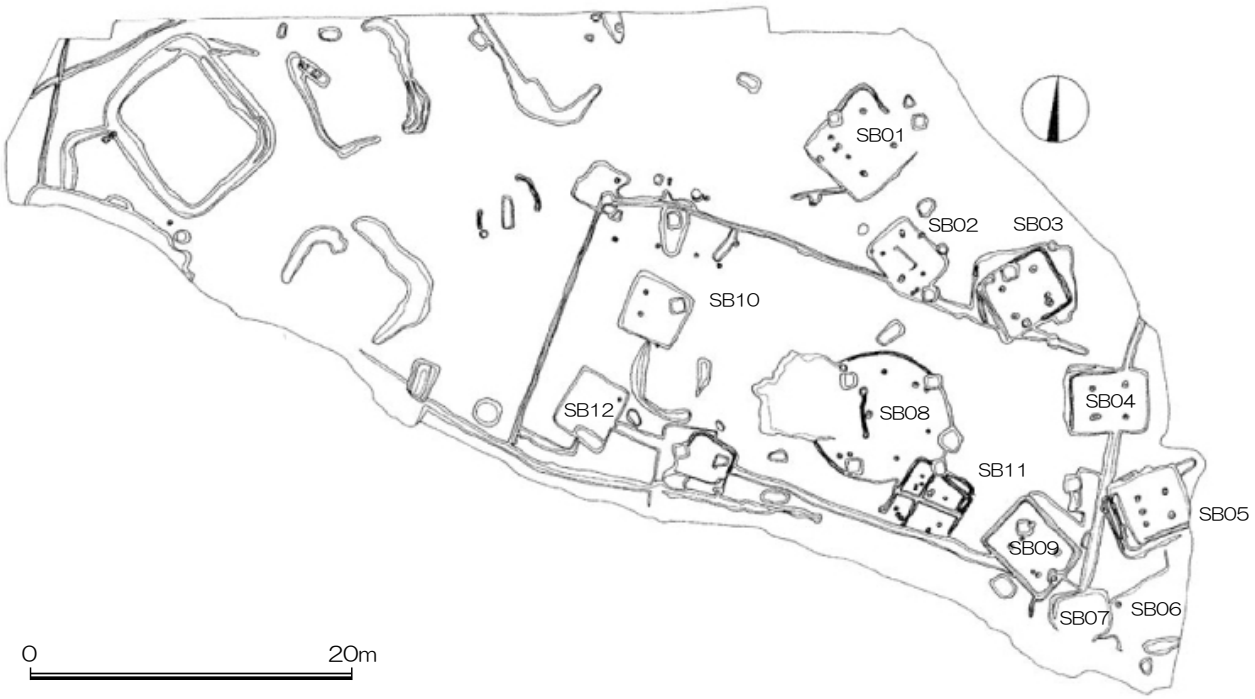
沖ノ坂遺跡（おきのさか）

所在地　鈴鹿市国分町

沖ノ坂遺跡は鈴鹿川左岸の，南に向かって突き出す狭い舌状の台地に位置しています。東側には小さな谷を挟んで中尾山遺跡が，国分川の谷を挟んで西側には磐城山遺跡が立地しています。

調査の結果，弥生時代中期中葉から後期前葉にかけての竪穴住居 20 棟を確認しました。中期中葉の竪穴住居は大型で平面形が円形（SB08）です。中期後葉には正方形の竪穴住居と変化します。その後，中期後葉から後期前葉が集落の最盛期となり，平面形が正方形から長方形と変化した竪穴住居は同じ場所での建替えがみられます。建てられた場所も谷からやや奥まったところから丘陵の先端部へと移動します。

沖ノ坂遺跡の集落の展開は，対岸の中尾山遺跡の変化と密接に関連していると考えられます。



遺構平面図

中尾山遺跡（なかおやま）

所在地　鈴鹿市国分町

中尾山遺跡は鈴鹿川左岸の東西を比高差約 15 mの開析谷に挟まれた東西 20 ～ 50 m の狭い舌状台地に位置します。

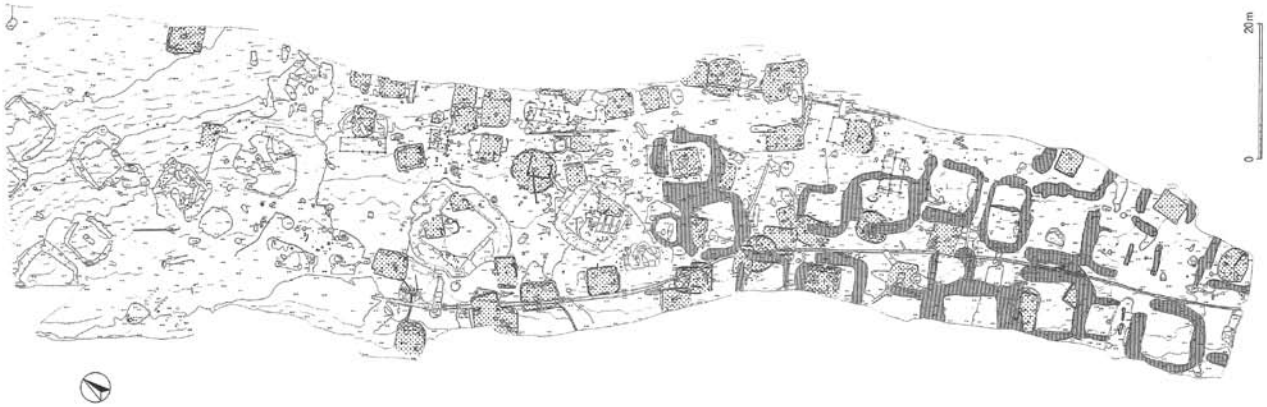
調査の結果，弥生時代中期中葉の竪穴住居 55 棟，掘立柱建物６棟，中期後葉の方形周溝墓２２基など多数の遺構が確認されました。

竪穴住居は方形と円形のものがあります。方形の竪穴住居の中には火災を被ったものも確認されています。

掘立柱建物は桁行（けたゆき）６間，梁行（はりゆき）１間のものが最大です。また，独立棟持柱（どくりつむなもちばしら）をもつ建物も見つかっています。独立棟持柱とは，建物の棟を直接支える柱が建物の梁行の柱列から外側に独立して立つもので，伊勢神宮を代表とする神明造（しんめいづくり）社殿に現存し，銅鐸や土器に描かれています。

方形周溝墓は，西側の谷に平行して列をなして築かれています。竪穴住居跡と重複し，集落が廃絶した後に墓域へと変わっていきます。一辺 12 mのものが最大で，最小のものは４ m程度です。周溝を共有するものとそうでないものとがあります。また，大半が四隅の一部が途切れています。周溝内からは完形に近い土器や焼成後に孔をあけた土器が出土しています。

遺物は土器のほか，打製石鏃（だせいせきぞく）・石錐（いしきり）・石庖丁（いしぼうちょう）・磨製石斧（ませいせきふ）・石製紡錘車（せきせいぼうすいしゃ）・磨製石剣（ませいせっけん）・石小刀（いしがたな）・管玉など豊富な石器類が出土しています。（常設展示室で展示中）



遺構平面図

境谷（さかいだに）遺跡　所在地　鈴鹿市国分町

境谷遺跡は鈴鹿川左岸の標高 43 ～ 44 mの台地上で，沖ノ坂遺跡・中尾山遺跡よりもやや奥まったところに位置しています。

これまでに３次の調査を実施しています。１・２次調査ではリサイクルセンター２期事業に伴い，１万５千㎡を超える面積を発掘し，弥生時代中期中葉から後葉の竪穴住居を 65 棟確認しました。

みつかった竪穴住居は沖ノ坂遺跡と同様に，平面形が円形と方形の２種類があり，円形→正方形→長方形と変化します。住居のなかには柱などの木材が焼け落ちた状態でみつかりました。円形の竪穴住居は全て，方形の竪穴住居では１棟が焼失しています。焼けた原因については失火，もしくは住居を廃棄する際に意図的に燃やした可能性が考えられますが、現在のところまだわかっていません。

出土遺物は土器のほかに、石鏃・砥石・磨石・石斧・石庖丁・垂飾（すいしょく）などの石器が豊富にあります。

遺構平面図

八重垣神社遺跡（やえがきじんじゃ）

所在地　鈴鹿市十宮町

八重垣神社遺跡は鈴鹿川が下流にさしかかる標高 11 mほどの低地に位置します。基盤となっている地層は，台地とは異なり，より新しい時代の河川によって堆積したものです。

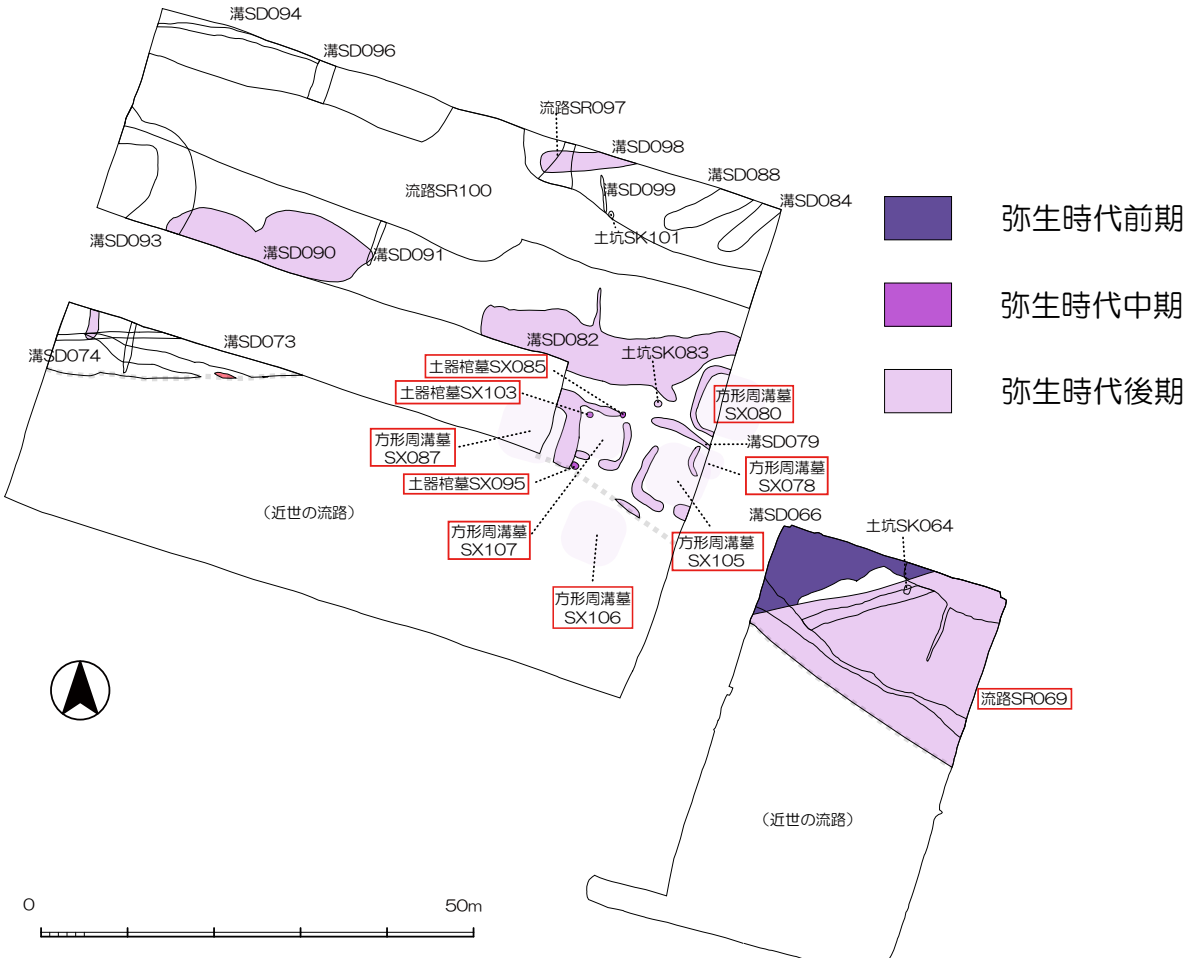
これまでに６次の調査を実施し，弥生時代前期から後期の遺構・遺物が確認されています。

６次調査で確認した弥生時代前期の溝 SD066 は遺物を多量に含み，付近に隣接して集落が営まれていたと思われます。溝 SD052 から出土した沈線文（ちんせんもん）系の壺形土器（常設展示室で展示中）は北陸地方に分布の中心があるものです。同種土器が分布する美濃（みの）・尾張（おわり）地域を介して交流があったと考えられます。

弥生時代中期後葉の土器棺墓を３基確認しました。甕（かめ）と壺を棺として使用しています。

弥生時代後期には ６基の方形周溝墓が，狭い範囲に密集して営まれました。中期の土器棺墓も含め，低地内の限られた微高地（びこうち）に墓域が形成された結果，密集した分布を示すに至ったのでしょう。

居住域については明確にできませんが，流路 SR069 の北側や方形周溝墓群の東側に居住域を想定することができます。流路 SR069 には古墳時代前期の土師器も認められることから引き続き付近に集落が営まれていたと思われます。



６次調査遺構平面図

須賀（すか）遺跡

所在地　鈴鹿市矢橋三丁目

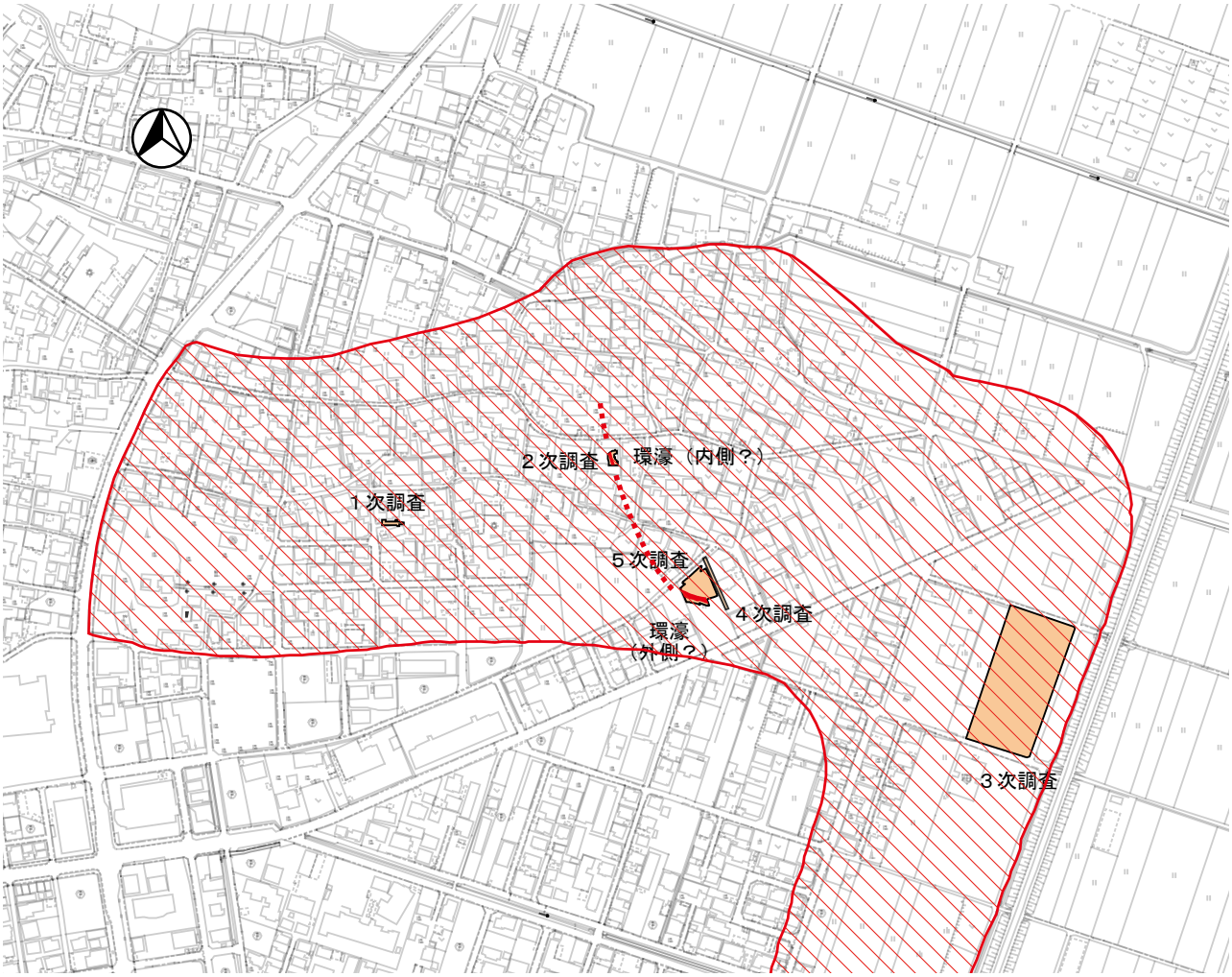
須賀遺跡は鈴鹿川右岸の低位段丘末端部に位置します。標高 10 m前後の微高地は水害の恐れもなく，集落の立地に適した場所で，西から十宮古里遺跡，萱町（かやまち）遺跡と弥生時代の集落跡が続いています。

これまでに７次の調査が実施され，弥生時代前期から中期の環濠，方形周溝墓が確認されています。明確な遺構は確認されていませんが，後期の遺物も出土しています。

2･5次調査で確認された弥生時代前期から中期の環濠は幅３～５m，深さ1.3mを測り，断面は台形状をしています。前期から中期の土器が多数出土しました。この濠は低位段丘の末端部分の東西 150 m，南北 250 mほどの範囲を区画するものと考えられます。

方形周溝墓は７基確認されています。６次調査では前期にさかのぼる可能性が考えられる墓が確認されています。

調査区による制約や宅地化が進んでいるため，遺跡の様子はまだ明らかにはなっていませんが，おそらく低位段丘や自然堤防上に居住域が営まれ，低地では稲作など農業生産活動の場として利用されていたと考えられています。



調査区位置図

上箕田遺跡（かみみだ）

所在地　鈴鹿市上箕田町

上箕田遺跡は昭和 35（1960）年，人物や鹿，矢印の狩猟絵画が描かれた壺の出土を契機（けいき）に知られるようになった伊勢湾西岸を代表する沖積低地（ちゅうせきていち）の弥生遺跡です。自然堤防からなる微高地を中心に遺跡が残されています。

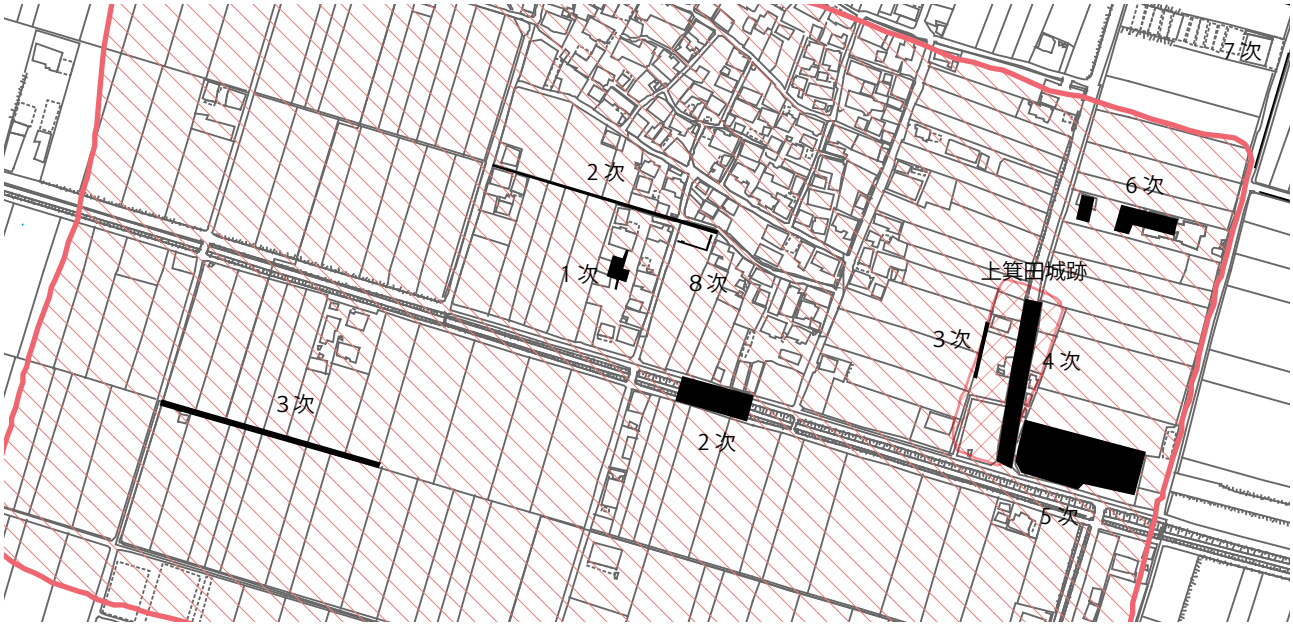
これまでに８次の調査を実施し，弥生時代前期から後期の遺構・遺物が確認されています。

当時はまだ鈴鹿市には埋蔵文化財を調査する専門の機関も無く，開発によって調査されることなく遺跡が失われてしまう状況の中，神戸高校の教員・生徒の手によって市内で初めて本格的に発掘調査が行われました。調査の結果，土坑（どこう），炉（ろ），中期以前の杭列（くいれつ），後期の杭列・溝が検出され，後期の溝と杭列は，ほぼ平行して確認されました。遺物には前期から後期の土器・石鏃・石斧・木製品・編物・炭化米・クルミなどの種子類・昆虫や貝などの動物遺体など豊富にあります。

２次調査も神戸高校によって実施され，前期・中期・後期各時期の溝，土坑，後期の方形周溝墓が確認されました。遺物には，前期から後期の多くの土器・石鏃・石庖丁・石斧・編物製品があります。注目されるものに，当遺跡で２例目となる鹿が描かれた土器片と銅鐸形土製品があります。銅鐸形土製品は，鈕（ちゅう）の一部が欠けていますが，ほぼ原形をとどめ，袈裟襷文（けさだすき）(7) がヘラ描沈線（がきちんせん）によって表現されています。

５次調査では耕地整理のため遺構の残りが悪い情況で，中期の方形周溝墓２基が確認されたました。ともに一辺４～５ｍで四隅が途切れます。

今も遺跡の全容は明らかではありません。当時の居住域については，現在の集落を中心に広がる微高地と同位置であるか，遺物が豊富に得られた３次調査区の南とも考えられています。



調査区位置図

岸岡山Ⅲ遺跡（きしおかやまさん）

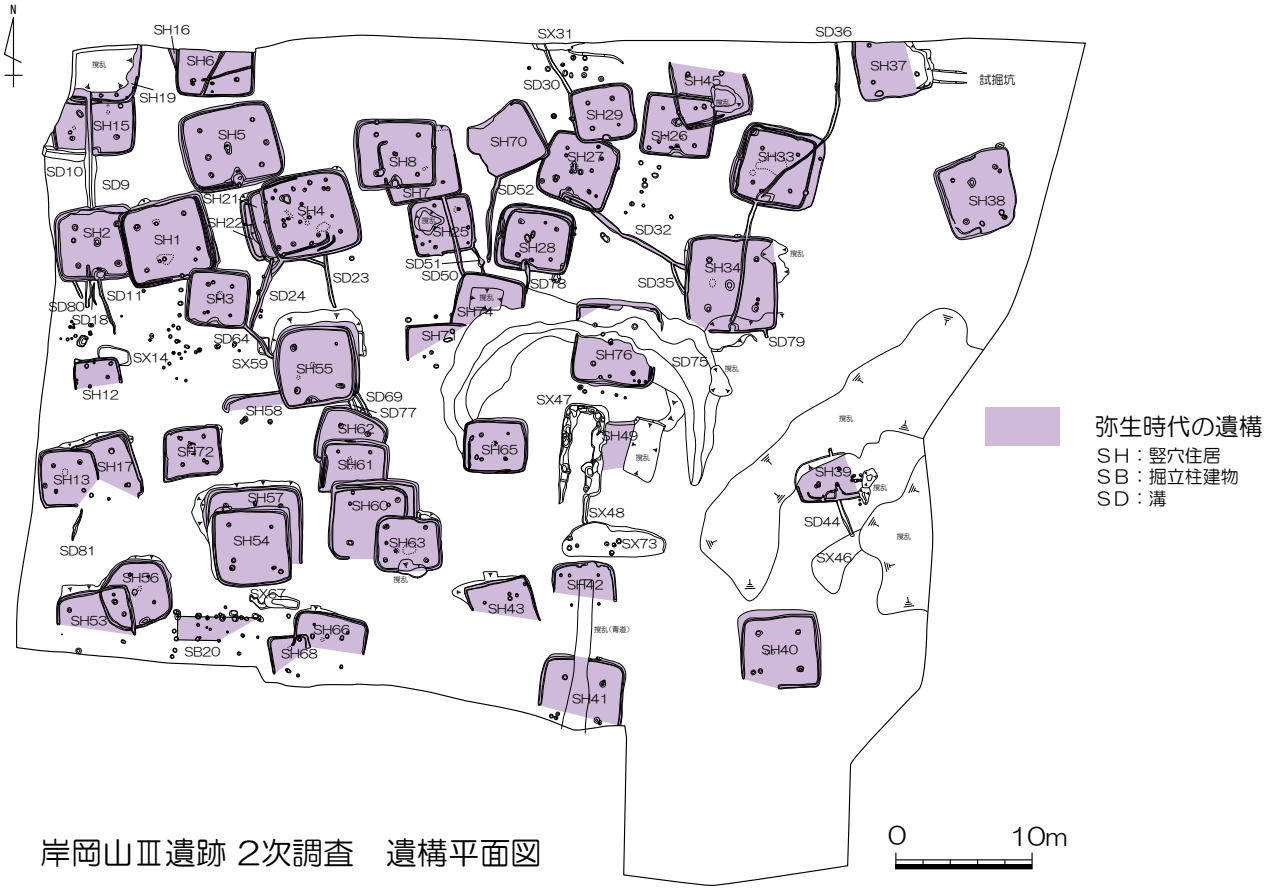
所在地　鈴鹿市岸岡町

岸岡山Ⅲ遺跡は伊勢湾を望む岸岡丘陵のほぼ全域に分布します。これまでに２次の調査を実施しています。その結果，８０棟を超える弥生時代後期の竪穴住居が確認されました。

１次調査は見当山（けんとうやま）の北側緩斜面において，弥生時代後期の３０棟を超える竪穴住居，方形周溝墓１基を確認しました。竪穴住居の分布をみると急傾斜地に建つ竪穴住居は同一箇所で建て替えられていましたが，傾斜の緩いところでは，建物が重複することなく建てられていました。

２次調査は１次調査の北西，雲雀山（ひばり）の南側斜面において実施し，弥生時代後期の竪穴住居 50 棟，掘立柱建物１棟を確認しました。竪穴住居は最大のものは一辺６ｍを超え，最小のものは一辺３ｍ前後を測ります。竪穴住居の同一箇所での建て替えはみられますが，１次調査のような規則性はみられません。

遺物には土器のほか，各調査で人為的に荒割加工された水晶原石が出土しました。２次調査では筋砥石が出土し，玉作りをしていた可能性が考えられます。また，用途不明の土製品も出土しています。



岸岡山Ⅲ遺跡 2次調査　遺構平面図

天王遺跡（てんのう）

所在地　鈴鹿市岸岡町

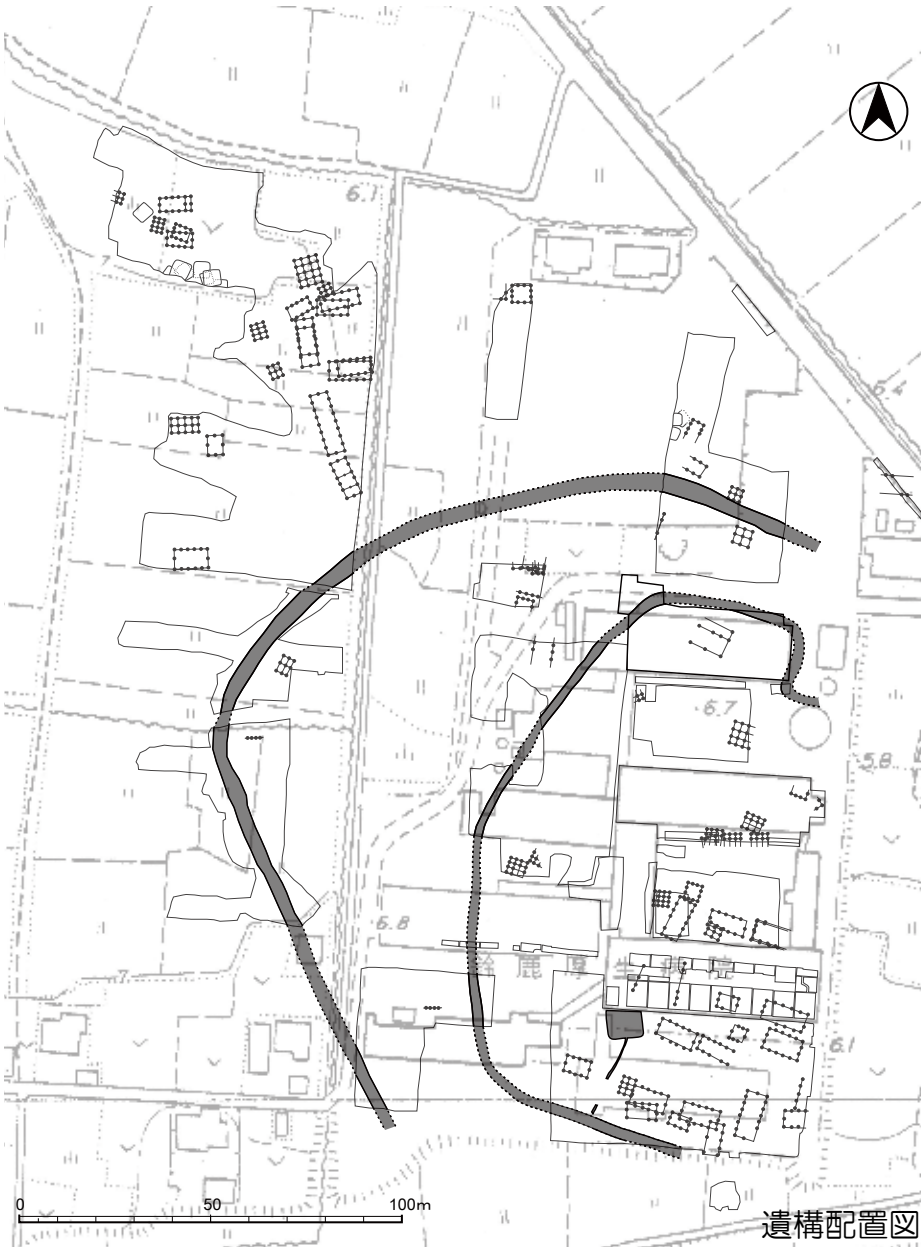
天王遺跡は鈴鹿川右岸に形成された段丘がちょうど海岸平野に埋没していく先端部にあたります。北側を金沢川（かなさいがわ），南側を田古知川（たこちがわ）に挟まれた標高５m前後の半島状の微高地です。南へ約 500 mの位置には岸岡山Ⅲ遺跡があります。

これまでに 15 次の発掘調査を実施しました。その結果，弥生時代から近現代の遺構・遺物が確認されています。弥生時代の遺構としては二重にめぐらせた環濠と竪穴住居が確認されています。

二重にめぐらせた環濠のうち，外濠は幅３～５m，深さ 0.8 ～ 1.7 mで断面の形状が逆台形をしています。およそ東西 170 m，南北 150 mの範囲を囲み，総長２９０m を確認しています。内濠は幅３m，深さ２m，断面Ｖ字状です。およそ東西７５m，南北 140 mの範囲を囲み，北辺において「かぎのて」状になっています。溝内の遺物は少量ですが，土器が出土しています。

環濠の内部の遺構については，後世の遺構などでほとんどが失われてしまっています。そのような状況の中で竪穴住居が内濠の内部・南辺近くで１棟確認されています。その竪穴住居は一辺９m を超える大規模なもので，同一箇所での建て替えがみられます。環濠の外側では１棟確認されています。

弥生時代の集落が廃絶した後，古墳時代後期以降に埋没しつつあるこの二重の濠を再度掘削して利用していることも注目されます。



遺構配置図

十宮古里遺跡（とみやふるさと） 所在地　鈴鹿市神戸四丁目

十宮古里遺跡は，鈴鹿川右岸の低位段丘上に位置し，旧神戸中学校の敷地を中心とし，東に隣接して，萱町遺跡・須賀遺跡が所在します。1948（昭和 23）年，校庭拡張に伴い弥生土器が出土し，遺跡の存在が知られるようになりました。

弥生時代の遺構としては，大溝１条や方形周溝墓４基などが検出されました。

大溝は調査区中央を南北に横断するように延長25ｍにわたって確認されました。幅2.5～３ｍ，深さ１ｍ，断面台形状の溝で，壺・甕・高坏（たかつき）・器台（きだい）などの土器が大量に堆積していました。

方形周溝墓は大溝の東側に位置し，大溝と向きを揃えるように分布しています。規模は最大のもので 12 ｍ，最小のものが 4.5 ｍを測ります。確認されたうち東の１基は南辺の中央に，大溝沿いの３基は南辺のいずれかの隅を陸橋部としています。

掘立柱建物は六角形状に柱を配置します。調査区の北東端で確認されたことや，調査区内ではその他の建物跡が確認されていないことなどから，居住域は北側に展開していたものと考えられます。

遺構平面図

長法寺遺跡（ちょうぼうじ）

所在地　鈴鹿市長法寺町

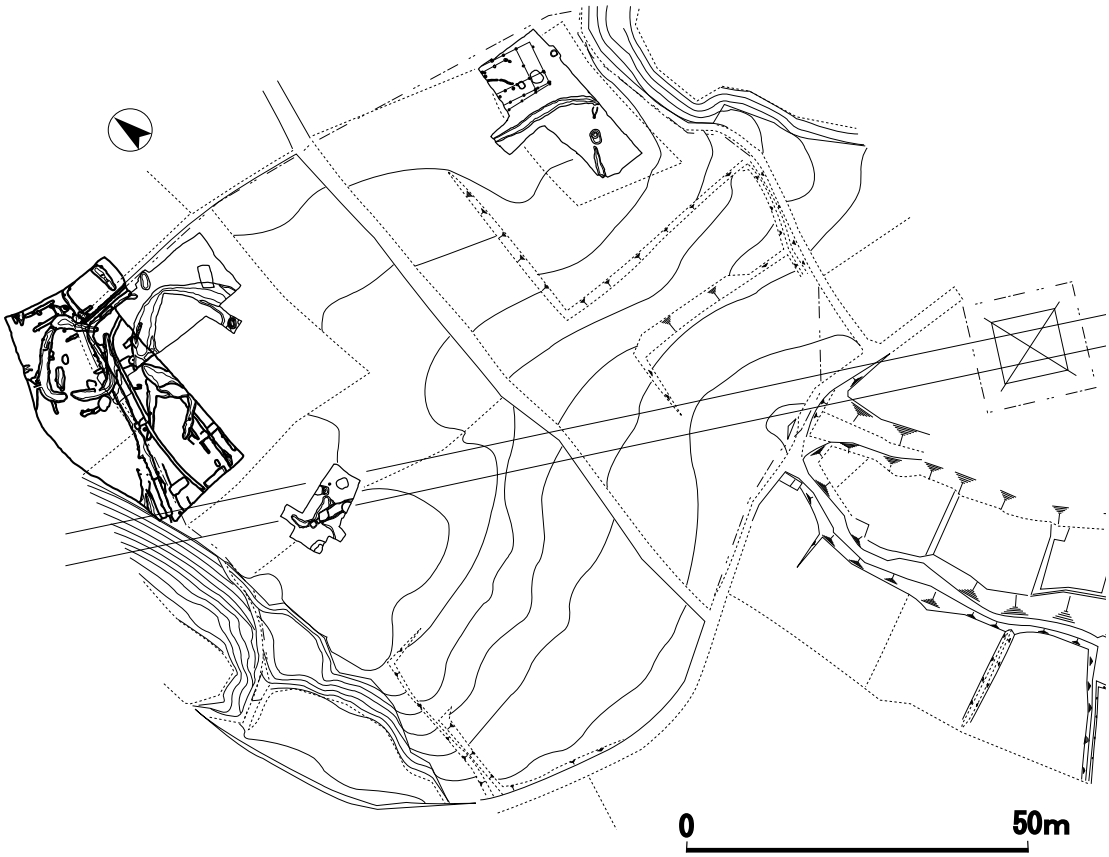
中ノ川左岸には鈴鹿南西部丘陵地と呼ばれる丘陵が広がっています。長法寺遺跡は中ノ川左岸に向かって張り出した舌状の丘陵上に立地します。鈴鹿川流域と比べ，中ノ川流域では，弥生時代の遺跡は少なく，また，調査された遺跡も少ない状況ですが，下流の磯山町では明治時代に銅鐸が出土しています。

これまでに２次の調査を実施し，弥生時代中期の方形周溝墓７基が確認されています。

１次調査では，中期の方形周溝墓５基を確認しました。調査区による制約のため，全体の規模はよくわかりませんでした。その後，１次調査区に隣接して，２次調査が行われ，１次調査で確認された方形周溝墓の延長と新たに２基の方形周溝墓を確認しました。

方形周溝墓の規模は最大のもので 11.4 m× 9.6 m，最小のもので一辺３m 強を測ります。周溝内からは完形に近い壺と逆さにした状態で置かれた甕や石斧などが出土しました。これらのうち５基の方形周溝墓は密集して築かれています。このうち２基の方形周溝墓は溝が重複します。その他は，溝が重複することはありません。そのうち１基は先に築かれた墓の周溝を避けるように造られているようです。

これらの墓を築いた人々の集落については，これまでの調査ではわかっていません。丘陵上には比較的平坦な土地が広がっているほか，裾には低位段丘が広がり，この周辺に存在したものと考えられます。



遺構平面図

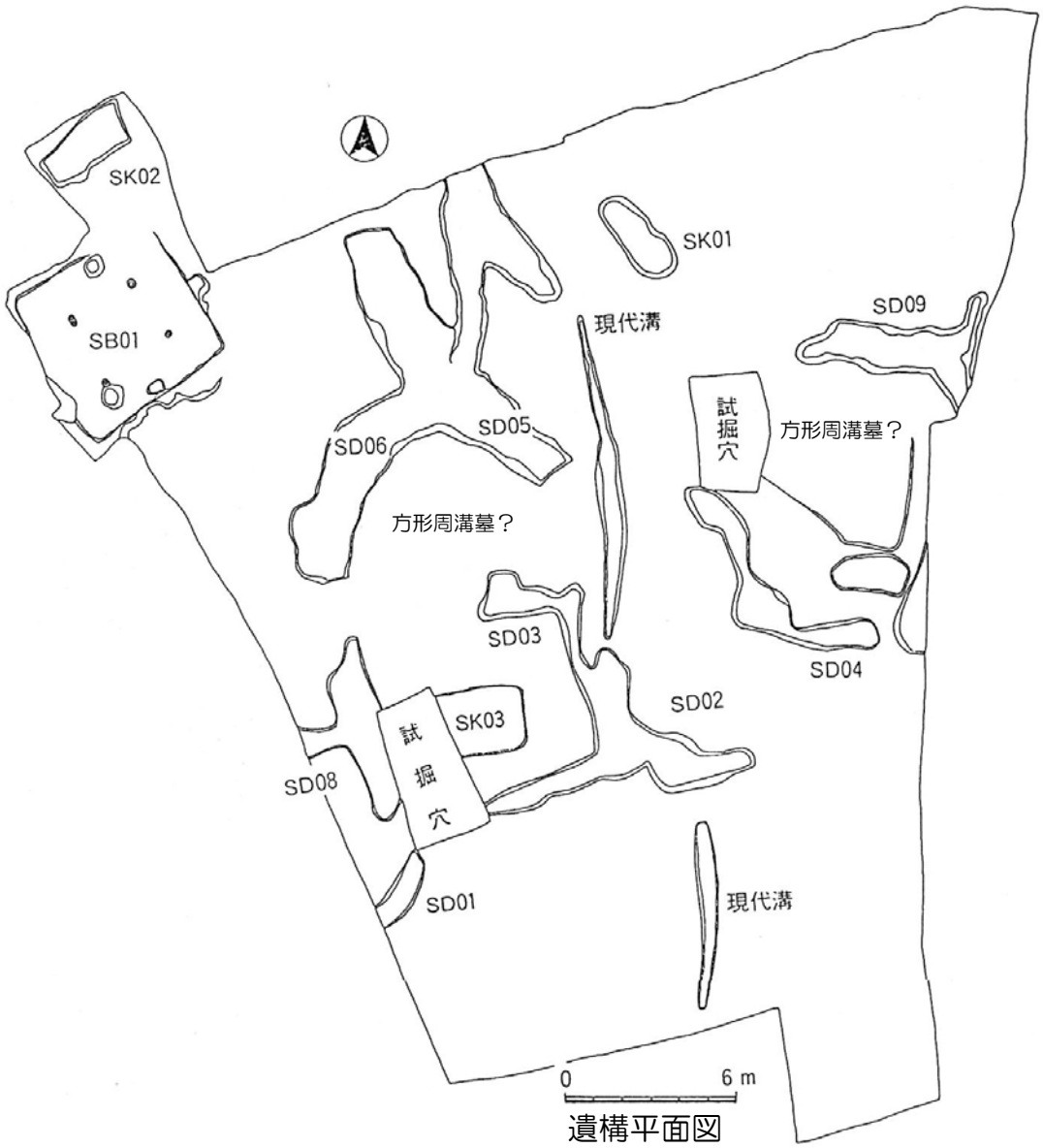
羽舞場遺跡（はまいば）

所在地　鈴鹿市小田町

国道１号線を鈴鹿市から亀山市へ向かい市境に至ると国道は丘陵の東端をカットしています。この丘陵の先端一帯は茶臼山と呼ばれ，標高約 56 mになります。茶臼山の東を鈴鹿川が，北を安楽川が流れ，すぐ下流で合流しています。茶臼山丘陵の周囲には両河川によって形成された標高 40 m前後の高位段丘が広がり，合流点へ向かって半島状に延びています。羽舞場遺跡が立地するのはこの茶臼山の北麓の緩傾斜地です。

土地区画整理事業に伴い発掘調査が実施され，弥生時代中期の溝が確認されました。

遺構は侵食により不明瞭になっていましたが，「L」字または「コ」字の溝状に掘り込まれ，弥生土器中期の壺・甕が完全な形ではありませんが，個体ごとにまとまって出土しました。状況から溝は方形周溝墓の溝の可能性が考えられます。



遺構平面図

双児塚遺跡（ふたごづか）

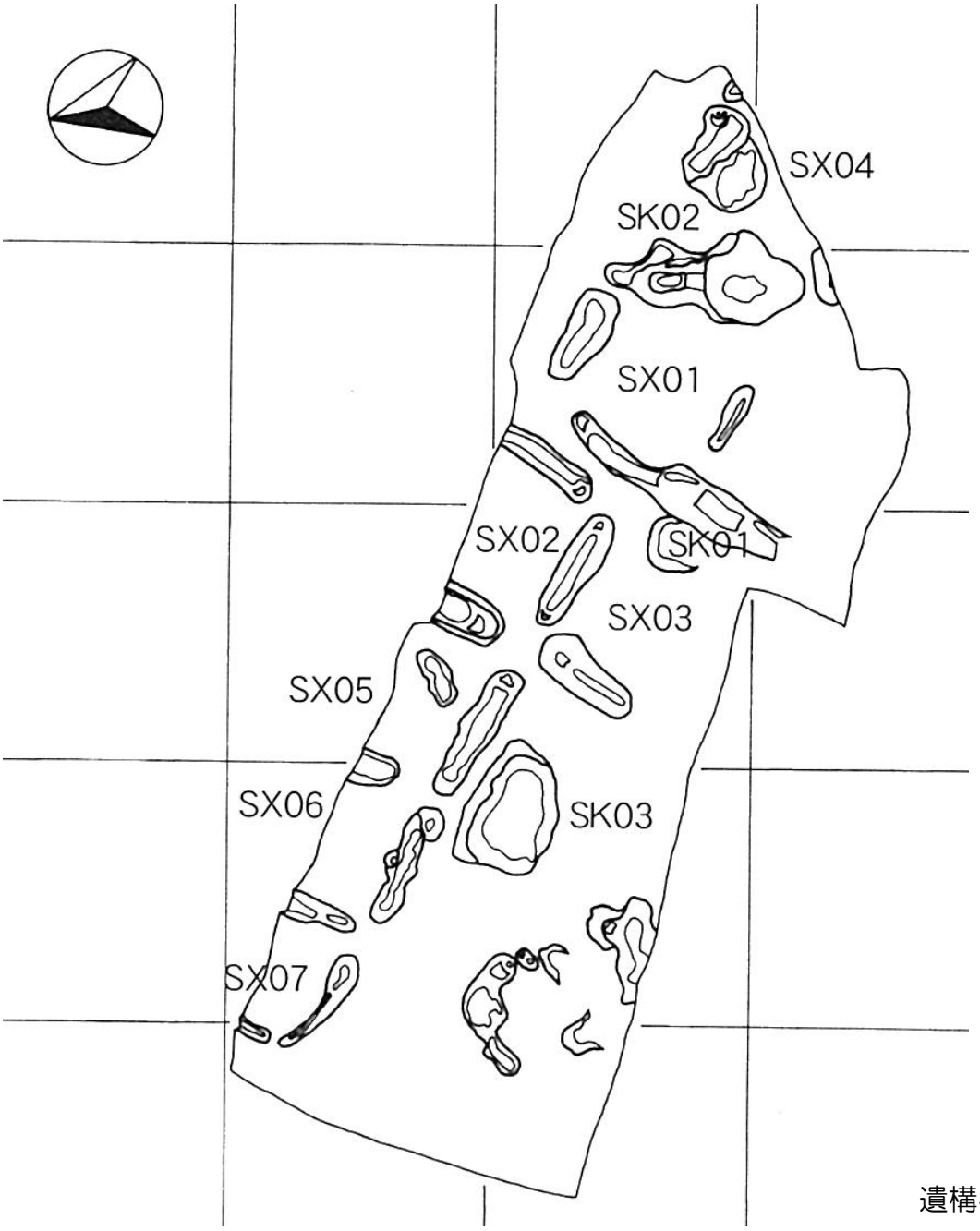
所在地　鈴鹿市伊船町

双児塚遺跡は御幣川（おんべがわ）左岸の段丘上に位置し，調査前は山林でした。

工業団地造成に伴う発掘調査では段丘最上部の辺縁部で弥生時代中期の方形周溝墓を７基確認しました。

埋葬施設などはすでに削平されており，周囲に掘られた溝だけが残っていました。溝の共有関係などから東のSX01・04と西のSX02・03・05・06・07の２群に分けられます。西群の５基は，周囲の溝を共有しています。SX03を除く４基は東西一直線に並び，連続するように築かれていました。SX01とSX03は溝が重複しますが，先後関係は明らかにはなりませんでした。

周溝内からは弥生土器甕・壺などが少量出土しました。



遺構平面図

用語解説

（1）方形周溝墓（ほうけいしゅうこうぼ）・・・溝で四角く区画した中に土を盛り，そこに埋葬を行う墓。普通，区画の中には複数の遺体が埋葬された。溝の四隅もしくはいずれかが途切れ，陸橋状になったものが多く，墳丘への通路と考えられる。

（2）土器棺墓（どきかんぼ）・・・甕や壺などの土器に遺体を納めて穴に埋葬する。普通は乳幼児の墓と考えられるが，遺骨を集めて再び埋葬する例もある。

（3）土壙墓（どこうぼ）・・・単に穴を掘って遺体を埋葬したもの。普通，棺の痕がはっきりしないものをいう。

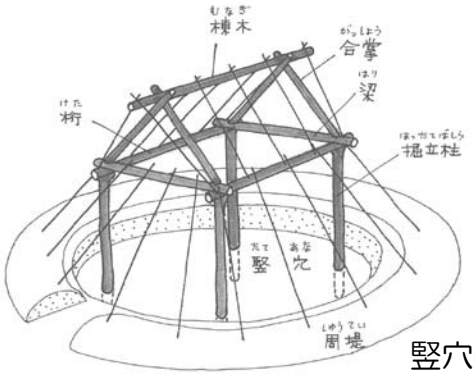
（4）遠賀川系土器・・・稲作とともに北部九州から伝わってきた土器の型式。

（5）擦（す）り切（き）り技法・・・石製品を作製するときに石材を分割する箇所を石鋸（いしのこ）などで擦りながら溝状にくぼめて切断する方法。

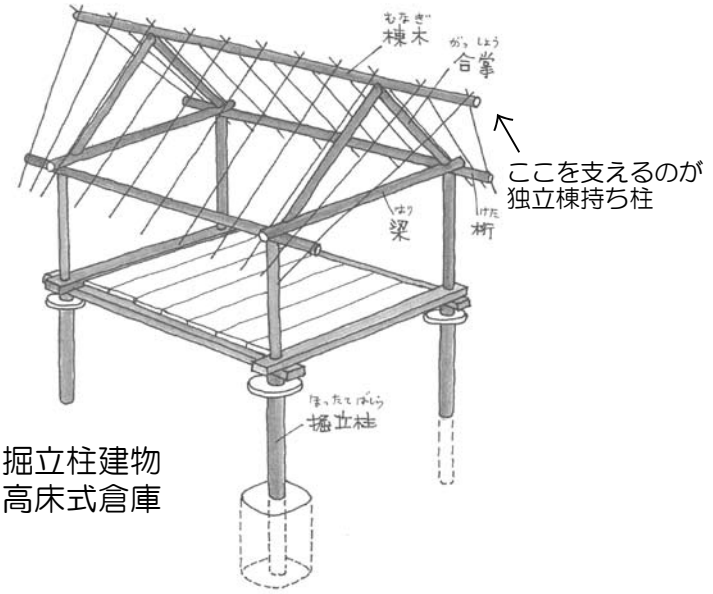
（6）環濠（かんごう）・・・集落の周囲に防衛や区画のために掘りめぐらされた溝。

（7）袈裟襷文（けさだすきもん）・・・銅鐸の文様。僧侶の袈裟や梵鐘の文様と類似することから，呼ばれるようになった。

竪穴住居と掘立柱建物



竪穴住居



掘立柱建物
高床式倉庫

宮本長二郎『平城京　古代の都市計画と建築』草思社 1986　より引用

鈴鹿市考古博物館
Suzuka Municipal Museum of Archaeology
〒513-0013　鈴鹿市国分町２２４
ＴＥＬ０５９－３７４－１９９４　　ＦＡＸ０５９－３７４－０９８６
ＵＲＬ　http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/